発刊の辞

下向井　龍彦

この学部に来て三年の歳月が過ぎようとしている。その間、私のもとで一名が修士論文を、一六名が卒業論文を提出した。卒論読書会は一回、一月に始まる。後期試験が終わる二月中旬までは週一回、それ以降七月までは週二回、毎回二人が卒論関連論文を要約紹介し、参加者全員で討議する。その過程を通じて各自、テーマ・問題意識・視角と方法を明確にし、研究を進めていく。教員採用試験がはじまる前の七月と教育実習が終わったあとの一二月に中間発表。そ

研究室で毎年繰り返される卒論カレンダー。これが私の放感と充足感とを味わいつつ卒論を提出する。

今の学生たちが「学問」を実感するのは卒論だけである。

問題をいかげんにして卒業していく学生は、せっかく学問の府に身を置きながらつい「学問」に縁がなかったかわいそうな学生といわざるをえない。学校教育学部は教員養成を目的とすれば、学部研究は必要ないという議論があるとすれば、それは誤りである。学問の面白さ・厳しさを自ら体験せずして、子供たちに何が語れるというのか。

大学は「学問」を体験させるところである。人生における唯一の真剣につきあうのは、彼らが、私のもとで卒論を書く唯一のチャンスであることに気づいてもらいたい。卒論は彼らの一生の問題を学問的に苦闘した結晶である。

完成した卒論は取り組んだ思いが刻まれている。研究室の書架の奥深くに埋もれたままにしておくのは忍びない。何らかの形で公表したいと思う。

楽しくチャンスを自ら体験し、学問の面白さ・厳しさを体験し、子供たちに何が語れるかを考えるこの研究室の書架のさらに一年間、思いが苦闘の結晶であり、

なかなかに、八月末までに全員、卒論抄のフロッピーディスクを出してくれた。『史人』はこのような事情で刊行される運びとなったのである。『史人』の発刊によって、修論・卒論の水準がますます向上することを念願する。

本誌に掲載したのは、一九九六年一月に提出した卒業論文抄の原稿には、在学生が誤字の訂正や体裁の統一。提出されたのは、まったく手を加えていない。一のための補正をしたほかは、まったくの完成度はもっと高くなったかもしれないが、雑事に紛れてなしえなかった。読者は、あくまで「学術論文」「卒業論文抄」として公表することはしない。

としたお読み戴きたい。

『史人』の誌名の由来は、ふるく旧制広島文理科大学史学研究室の教室内同人誌に遡る。広島の日本史研究のよき伝統を受け継ぎたいという思いを込めての命名である。

この『史人』は、港を出てすぐに沈没するかも知れない。このまま私の研究室の内部雑誌とし、含むべきものもよい。近世近代史専攻学生を含む学校教育学部日本史分科会合同の雑誌に進んでいくのもよい。

広島大学教育学部・学校教育学部・学生文学部・総合科学部・横断・総合雑誌の方向性に進んでいくもつてはいなかろう。

教育学部・学校教育学部・学生文学部・横断・総合雑誌の方向性に進んでいくもつてはいなかろう。

学問に対する熱意と主体性が進路を決めるだろう。

『史人』はいま船出する。